

自然との関わりに注目した保育教材としての どろ遊びに関する考察

——全国アンケート調査を中心に——

松 山 有 美

はじめに

2011年3月11日に起こった未曾有の出来事は、人間に自然が持つ力をあらためて知らしめたと同時に、人工物に囲まれて生活する現代社会に生きる人間に、自然に寄り添う生活の大切さを再認識させた。特に、福島県での原発事故をきっかけに自然エネルギー、循環型の社会や持続可能な社会の創出への関心が一気に注目されたのは、周知の通りである。こうした自然環境をめぐる社会的うねりは、教育現場においても例外ではない。実際に東日本大震災以降、被災した子どもたちの教育環境の整備はもちろんのこと、日本全国において自然および環境教育への見直しが防災教育と共に早急に取り組まれるべき課題となっている。

しかしながら、幼稚園教育・保育と自然および環境との関わりは、なにもこの数年ではじまったことではない。幼児教育・保育において自然は切り離すことが出来ない存在であり、明治期から脈々と流れるその関わりは、現代社会の中で形を変えながらも生き続けてきた。それは、『幼稚園教育要領』や『保育所保育指針』にも示されている通りである。それ故、これまでに発表されてきた幼稚園・保育現場における自然に関する研究の蓄積は少なくない。その内容は、園庭の自然環境に関する研究(井上・無藤,2006; 大澤,1999)、自然環境と自然体験についての検討(田尻・無藤,2005; 田尻, 2002)や幼稚園および保育園における動物飼育に関する研究(安藤, 2011)と多岐にわたっている。また、本共同研究の基盤となる自然保育と子どもの発達に関する研究は、2010年より名古屋経営短期大学子育て環境支援研究センターのメンバーを中心に、保育学会での発表および研究論文として発表されてきた(竹川,2010; 吉田,2011; 吉田・稲垣,2011; 江村,2012)。

これら多くの先行研究によって、自然は「人工物に比べて様々な生体験が可能となり、結果として幼児の発達に肯定的な影響を与える」という「経験的事実」が明らかにされてきた(田尻 2005)。さらにこれらの先行研究は、幼児教育・保育現場をめぐる自然体験活動に関する共通課題として次の3点に言及している。①都市化により子どもたちが日常的にアクセスすることができる自然

環境が非常に限られている状況において、園での自然体験・活動の提供が強く求められている一方で、その整備は園や地域による差が大きい。②自然環境の提供およびその体験活動の継続性が十分ではなく子どもたちにとって限定的な体験としてとどまっている。③自然体験・活動における保育者の意図的な役割は不可欠であるにもかかわらず、その養成が十分ではない。なるほど、幼児期における自然との関わりは、子どもたちの成長発達に肯定的な影響を与えるものの、その環境整備、時間的な継続性、さらにはその保育環境を提供する保育者の知識・技能において改善の余地があるという現状が浮き彫りにされてきたのである。換言すれば、これまでの研究では、実践的知見から自然と関わる保育の有効性が明らかにされるとともに、その活動を提供することができるソフトおよびハード面での不備が指摘され、それらの課題は未だ積み残されているのである。

こうした先行研究からあぶりだされた知見を踏まえて、本共同研究の射程には、次の目的が含まれている。すなわち、具体的な自然素材を用いて実施する調査研究を通して、理論的分析と実践的方法論の検証を導きだし、これまで蓄積された研究によって提示された自然と保育をめぐる課題をいかにして乗り越えることができるのかを明らかにすることである。本共同研究で用いる自然素材とは、土の粉から生成される「土粘土」である。本共同研究報告書においてもたびたび言及されているように、土粘土に注目する理由としてはいくつか挙げられるが、特に研究的意義としては、保育現場における「土粘土」という自然素材に注目した研究は、管見の限り非常に少ないことがいえるだろう。そもそも、土という素材は我々の足元に常に存在しているもっとも身近な自然といえる。どれだけ都市化が進んだ幼稚園や保育所においても土がまったく存在しないということは考えにくい。もちろん、加速する保育現場の規制緩和によりビルの一室で行われる保育もめずらしくはなくなってきた。そうした保育現場では、園庭の土や砂場という環境を園の活動のなかで提供することは難しいかもしれない。しかしながら、子どもたちが自宅からビルの一室で展開される保育所まで行く道中に、なんらかのかたちで土を目にすること、場合によってはそれにふれる機会があるだろう。それほどまでに土は、我々にとって手に届く自然といえる。しかしながら、保育現場における土に関わる研究としては笠間(2012)の砂場研究や佐藤(1997)や前嶋(2007)による粘土の教材研究と非常に限られている。特に、土粘土によるどろ遊びに関する研究は、管見の限り見当たらない。ましてや、土粘土を自然素材として取り扱う研究における全国調査は、これまでに実施されていない。

先述の通り本共同研究は、我々の足元に存在する自然としての土を「保育素材」としてあらためて捉え直し、その素材を利用したどろ遊びが幼児の心と体を拓くための幼児教育・保育教材としていかなる可能性を帯びているのか、そして可能性があるかと仮定すれば、それを如何に実践の場で活用しうるのかを明らかにすることを研究全体の目的としてあげている。しかしながら、周知の通り本研究は、名古屋経営短期大学子ども学科子育て環境支援研究センターを中心として1年間をかけて継続的に実施された実践調査と全国調査を分析対象としているため、そのデータは膨大である。本論文の限られたスペースでは、先述した共同研究のねらいにそった分析を十分に

論じる事はできない。そこで、本共同研究のねらいに沿いながら、本論文における狭義の研究目的を次の二点に設定する。まず一点目としては、これまで様々な自然素材を事例として行われてきた保育と自然に関する研究のなかに、土粘土を素材としたどろ遊びを位置づける。自然と保育の研究から積み上げられてきた課題は、はたしてどろ遊びにおいても課題なのか否かも検討する必要がある。そして、二点目は土粘土を使うどろ遊びの特徴や特有の課題を浮き彫りにすることである。この二点の目的は、横軸において自然と保育における土粘土を使用したどろ遊びの位置づけを明らかにし、縦軸においてそれが内包する固有の特徴や課題を提示することができよう。どろ遊びの幼児教育・保育教材としての可能性を探る本共同研究の分析視角の1つとして本論文を位置づける。

I 調査方法

上記の目的を達成するために、本調査では調査紙を使用した全国調査を実施した。本章では、その調査から得た結果の一部を抽出して使用する。全国調査の調査方法は、本論文集の武論文を参照されたい。ただし、本章が扱うデータの基本的な概要を改めて提示する必要がある。次の通りである。

表1 アンケートの配布数と回収率

	配布数	回答数	回答率
保育所	253	106	41.9%
幼稚園	187	56	29.9%
児童発達支援事業所	86	33	38.4%
総数	526	204(195+9) ⁽¹⁾	38.8%

表2 アンケートの配布と回収率（地域別）

	北海道・東北	関東	北陸・中部	関西	中国	四国	九州・沖縄
配布総数	43	54	267 ⁽²⁾	54	31	22	55
回答数	14	21	125	8	16	4	16
回答率	32.6%	38.9%	46.8%	14.8%	51.6%	18.2%	29.1%

また、回答から明らかにされた各施設の運営形態は、公設公営（93施設、46%）、公設民営（14施設、7%）、私立（96施設、47%）及び無回答が1施設であった。

II 粘土遊び・どろ遊びの実態

ここでは、粘土遊び及びどろ遊びに関する全国調査の結果を具体的に検討したい。まずは、各施設において粘土遊び・どろ遊びが実施されているか否かを問う設問を確認していこう。表3に示したように、ほぼすべての施設で両遊びが活動の一部として組み入れられている事がわかる。実施していない施設の特徴としては、乳児を中心に受け入れをしている施設や障害児保育を展開している施設など、粘土やどろを使用した遊びが子どもたちの成長発達にそぐわない活動であることが調査結果から読み取れる。また、粘土遊びを展開する際に、どのような形で取入れているかという問いに対して、多くの施設では「集団遊び」(52.7%)としてよりも「個人遊び」(89.6%)として活動に取り入れていると答えている。

表3 粘土遊び・どろ遊びの実施状況

遊び名	実施している	実施していない
粘土遊び	201 施設 (99%)	3 施設 (1%)
どろ遊び	181 施設 (89%)	23 施設 (11%)

次に表4（個人遊び）および表5（集団遊び）は、粘土遊びを実施している施設においてどのような素材が粘土遊びに使用されているかを年齢別にその使用素材の頻度順に示している。具体的には、0歳児、1歳児、2歳児においては、小麦粘土の使用頻度が高く、一方、3歳児、4歳児、5歳児においては油粘土の使用頻度が高かった。土粘土に関しては、すべての年齢において使用頻度は低かった。粘土素材の使用頻度は、園の活動として「室内活動としての展開」を最も重視しているという結果（表6）と関わりがあると考えられる。ただし、その相関関係を明らかにするには、更なる分析を待たなくてはならない。

表4 粘土遊びの際に使用する素材（個人遊び）

年齢 \ 頻度順位	1	2	3	4	5
0歳	小麦粘土	その他			
1歳	小麦粘土	その他	油粘土	紙粘土	土粘土
2歳	小麦粘土	油粘土	紙粘土	その他	土粘土
3歳	油粘土	小麦粘土	紙粘土	土粘土	その他
4歳	油粘土	紙粘土	小麦粘土	土粘土	その他
5歳	油粘土	紙粘土	小麦粘土	土粘土	その他

表5 粘土遊びの際に使用する素材（集団遊び）

年齢 \ 頻度順位	1	2	3	4	5
0歳	小麦粘土	その他			
1歳	小麦粘土	その他	紙粘土	油粘土	土粘土
2歳	小麦粘土	油粘土	紙粘土	その他	土粘土
3歳	油粘土	小麦粘土	紙粘土	土粘土	その他
4歳	油粘土	小麦粘土	紙粘土	土粘土	その他
5歳	油粘土	小麦粘土	紙粘土	土粘土	その他

表6 粘土遊びを取り入れる際最も重視する理由

重視する理由	施設数
親子活動の促進	4
異年齢交流の促進	7
室内活動としての展開	144
個性や身体性の発展	85
無回答・無効回答	6

次に、どろ遊びに関して得られたデータを検討してみよう。どろ遊びを実施している施設においてどのようなどろの素材が使用されているかに関しては、その多くが園庭の砂や土を使用している事が明らかとなった。どろの素材である土の粉を購入しているのはわずか 25 園に留まっている。また、どろ遊びを園の活動として取り入れる理由に関しては、表7に示した結果となった。具体的には、どろ遊びを取り入れた理由に関して最も多かった回答は、「家庭でできない遊びの提供」である。なるほど、我々の実践調査からも明らかのようにどろ遊びの展開には、十分な準備が必要である。活動の規模には、園全体で取り組む大掛かりなものから、園庭の砂場を利用した小規模のものまで様々であろうが、園庭の整備、道具の準備、子どもたちの服装から片付けに至るまで、その活動工程は少なくない。それ故、家庭で行うには人手や場所の問題が発生することは明らかであるため、園の活動として取り入れることが妥当な選択として考えられているのだろう。

また、どろ遊びを展開する際は多くの場合水を使用することから、天気がよく気温の高い夏に活動が実施されると考えられる。それ故、園が提示する活動のねらいとして、「季節感の体験」が2番目に多く選択されているといえる。実際に、本共同研究の実践調査においても7月および8月を中心に活動を実施し、調査時は園庭に日よけのテントを設営し活動後にどろだらけになった体を洗うためのタライに水を貯めた状態で活動を行った。また、活動終了後に園児たちはプール

に入ることもしばしばあった。まさに、夏という季節をからだで感じる活動といえる。

表7 だろ遊びを取り入れた理由（複数選択可）

取り入れた理由	選択施設数
家庭でできない遊びの提供	143
異年齢交流の促進	27
季節感の体験	121
個性の発達	56

最後に、粘土遊びおよびだろ遊びの実施に対して保育者への研修を行っているか否かに関する設問をみてみよう。表8に示したように、それぞれの活動に関してほとんどの施設では、保育者研修を実施していない。実施していない理由は、調査結果からは明らかではないため詳細な分析はできないものの、粘土遊びに関して保育者研修をおこなっている12施設のうち、だろ遊びを実践しかつ保育者研修も行っている施設が6施設と全体の半数をしめていることから、研修それ自体を積極的に取り入れている施設が存在するといえるだろう。

表8 粘土遊び・だろ遊びに関して保育者研修の実施

	粘土遊び（201施設）	だろ遊び（181施設）
実施している	12施設（6%）	14施設（8%）
実施していない	180施設（90%）	163施設（90%）
無回答・無効回答	9施設（4%）	4施設（2%）

Ⅲ 考察

これまでに提示した全国調査から得たデータを通して、いくつかの点が明らかとなった。まず、粘土遊びは、幼児教育・保育の活動として施設において既に取り組みされており、その活動で使用される素材は、油粘土や小麦粘土などすべての年齢層に一致している。その一方で、粘土遊びの素材として土粘土は、十分な浸透をみせていない。特に、筆者らが意図している土の粉から展開する土粘土を使用した遊びへの展開は、ほとんど実施されていないことが明らかとなった。すなわち、自然との関わりを創出する幼児教育・保育の活動としての土粘土遊びは、萌芽的段階にとどまっているといえる。

一方、だろ遊びに関しては、室内活動を主とする粘土遊びに比べて園庭で展開されるよりダイナミックな活動として、多くの園で取り入れられている事がわかった。その活動は、家庭ではできない経験を提供するというねらいもっているだけでなく、季節感を感じる機会を子どもたちに与えるというねらいも担っている。この結果から、だろ遊びに期待されるねらいは、自然保育

に期待されているそれと近接していることは明らかであろう。子どもたちを取り巻く自然環境が限定されるなかで、家庭生活を通しては十分に体験することが出来ない自然体験の幼児教育・保育の現場における時間や場所の提供が施設側に強く要請されている。どろ遊びが幼児教育・保育活動の中に組み込まれているという実態は、まさにその役割を施設側が担おうとしている姿勢の表れといえる。

しかしながら、夏期に限定的に行われるどろ遊びは、一年を通した継続的活動としての役割を十分に果たす事ができない。これもまた、これまでの研究で明らかとなった自然体験活動の課題としてあげられてきた点から例外ではない。自然体験の活動は、継続性に乏しく日常的に繰り返される諸活動からは切り離された「特別な活動」、いわば非日常的な活動として位置づけられている。どろ遊びに関しても、季節的な制約があることは理解できるものの、その活動の継続性や他の活動との連続性という側面では未だ十分とは言えない。それは、多くの園で使用されるどろ遊びの素材が園庭の砂や土であり、どろ遊びの後に期待できる活動への展開は行われていないことから明らかである。すなわち、筆者らの共同研究が注目している、土の粉を利用したどろ遊びから土粘土を生成し、その土粘土を使用した造形活動への展開に至る活動は十分な実践がみられていない。

さらに、粘土遊びに関する保育者への研修は多くの施設において実施されていないことが明らかとなった。先述したように、実施されない理由は明らかではないものの、自然保育の知識とどろ遊びの実践をより具体的につなげるためには、自然保育およびどろ遊びに関する専門的知識や経験の積み上げが不可欠であろう。知識・技能・実習が保育者養成における重要な要素があることを踏まえれば、幼児教育・保育現場における現役の保育者への研修が、子どもたちの健やかな成長に資する環境を提供するために必要であろう。

ここまでの分析により、粘土遊び・どろ遊びの幼児教育・保育現場における活動の位置づけの一端が明らかとなった。動物の飼育や植物観察などこれまでに行われてきた自然と保育の活動の一事例として、どろ遊びは十分に位置づけられるものの粘土遊びは、利用される素材からその役割は十分に果たせていない。しかしながら、どろ遊びは、夏季限定の活動にとどまり継続性に乏しく、そこで利用される素材をみる限りにおいて他の活動との連続性も十分ではないだろう。また、利用される素材や準備の工程に関する知識や経験を積み上げる保育者研修が不十分であることから、幼児教育・保育教材としてのどろ遊びの展開は十分な成熟をみせていない。

IV まとめ

本論文は、粘土遊び・どろ遊びに関する全国調査の分析から、幼児教育・保育教材としてのどろ遊びの実態を追ってきた。その結果として、これまでの自然に関わる保育研究の知見から得た結果と、同様の結果がどろ遊びの実践に関しても得られた。

子どもを取り巻く自然環境が激変するなかで、幼児教育・保育現場が担う役割はますます肥大化する。自然物である土と水を利用したどろ遊びは、指先や足裏に感じるどろの感触から始まり、

からだ全体を使った動きへの発展を通して子どもたちのからだを拓くきっかけとなるだろう。また、自らの手で練り上げる工程で作り上げられる土粘土は、粉からどろそして粘土への変化を楽しむ、さらにその土粘土を使った造形活動に展開することで、子どもたちの心は新しい発見と達成感に満ち溢れるのではなかろうか。全国調査から明らかになった粘土遊び・どろ遊びをめぐる実態の分析は、土の粉から展開されるどろ遊びの特殊性を理解することを通して、より充実した活動への展開ができるという可能性の確信を筆者らに提供した。そして、その可能性の確信を実際の幼稚園教育・保育現場でより子どもたちにとって身近な活動として展開させるために、研究のさらなる深化および実践の積み重ねが今後の課題であろう。

【注】

- (1) 施設の種別において、保育所・幼稚園・児童発達支援事業所以外を選択した回答が9含まれていた。その内訳は、認定こども園1園、その他6園、無回答2園であった。これらの園が施設抽出の段階で上記三種のどこに属していたかは、回答用紙が無記名のため不明である。回答全体としてのデータとしては有効なため本章でもこの9園を含めた回答数を採用することとした。
- (2) 本研究を担っている子育て環境支援研究センターが属している名古屋経営短期大学は愛知県に所在している。地域性を考慮し、中部地区特に愛知県内の施設へのアンケートを多数実施した。それゆえ、全国調査ではあるものの中部地区において抽出した施設数は他の地域に比べて多くなっている。

【参考文献】

- 安藤ときわ (2011) 「幼児における動物飼育体験と思いやりの形成と関連性—共感性・向社会的判断の分析を中心として—」『こども環境学研究』Vol.7, No.3, pp.33-39.
- 江村和彦・竹川雅子・栗山陽子・松山有美・渡邉さらさ (2012) しなやかな心とからだを拓く自然保育3』『日本保育学会第65回大会発表要旨集』p.970.
- 井上美智子・無藤隆 (2006) 「幼稚園・保育所の園庭の自然環境の実態」『乳幼児教育学研究』第15号, pp.1-12.
- 笠間浩幸 (2012) 「砂遊びの長期観察から見てきた保育課題」『発達』Vol.33(132), pp.49-56.
- 前嶋英輝 (2007) 「幼児造形教育のための粘土場による実践」『順正短期大学研究紀要』第36号, pp.71-77.
- 大澤力 (1999) 「環境教育の視点から見た幼稚園園庭樹木の現状と活用の課題」『環境教育』Vol.8-2, pp.55-63.
- 佐藤智朗 (1997) 「保育素材としての土粘土(5):素材の特性を生かす」『日本保育学会第50回大会研究論文集』, pp.476-477.
- 竹川雅子・栗山陽子・陳恵貞・吉田幸恵 (2010) 「しなやかな心とからだを拓く自然保育」『日本保育学会第63回大会発表要旨集』p.161.
- 田尻由美子・無藤隆 (2005) 「幼稚園・保育所の自然環境と「自然に親しむ保育」における課題について—広域実態調査結果をもとに—」『乳幼児教育学研究』第14号, pp.53-66.
- 吉田幸恵・稲垣馨 (2011) 「障害のある子どもの発達と“どろんこあそび”実践—土・水(泥)という天然素材の有効性の分析を中心—」『子ども学科研究論集』3号, pp.1-14.
- 吉田幸恵・渡辺三保・竹川雅子・栗山陽子・陳恵貞・藤林清仁 (2011) 「しなやかな心とからだを拓く自然保育2」『日本保育学会第64回大会発表要旨集』p.233.

(名古屋経営短期大学子ども学科 講師)